

国民学校国文科国語における教育理念の継承について

——明石女子師範附属国民学校の場合——

黒 川 孝 広

一 研究の目的

一九四一（昭和一六）年から実施された国民学校は超国家主義的教育といわれている。教育内容は「鍊成」を目標として皇国化され、国語科も教科から科目へと変更され国文科国語となった。国文科国語の内容面では皇国教材の増加、以前は分節として取り上げることがなかった「話シ方」指導の強化や、教材内容を他科目と連携するなどの大きな変更があった。これらの変更点についてはすでに言語活動の面からと、教材表記の面からの調査を行った¹⁾。これらの調査から新たな問題が生じた。それは、急激な変化に各学校が対応したのかという疑問である。国民学校開始とともに授業内容や授業方法が大きく変化したのでは、教員が対応できない。また、各学校で積み重ねてきた教育の伝統は簡単に断ち切られるものであろうか。制度面では大きな変更はあったが、各学校の実態はどうであったか、つまり、同一の学校内で国文科国

語の理念がどのように継承したのかという問題点である。その問題を解明するためには、国民学校以前と以後との比較から、国文科国語の授業における教育理念の継承関係を明らかにする必要がある。そこで国民学校以前と国民学校期の授業記録があること、国民学校実施前にその学校独自の取り組みがあり、国民学校実施後と比較検討できることなどの条件を満たす学校を選び、調査することにした。本研究ではそれらの条件を満たす学校として、兵庫県明石女子師範学校附属国民学校²⁾（以下、国民学校期以前も含めて「明石附属」）を取り上げることにした。明石附属は国民学校に關する公開授業を多数実施し、その記録が神戸大学発達科学部附属明石校園カリキュラム開発研究センターに残されている。また、教育史上に有名な「八大教育主張講演会」で「動的教育論」を主張し、「分団式教育」で知られた及川平治（一八七五—一九三九）が中心となって教育方針を練り上げ、独自な取り組みをしていた大正自由主義教育の実践校である。本研究では一九四〇

(昭和二五)年から一九四四(昭和一八)年にかけて五回開催された明石附属の研究発表会から、国民科国語の授業案の中に、国民学校以前の教育理念のうち何が継承されているかを明らかにすることにした。

国民科国語の先行研究では、飛田多喜雄³⁾による授業案の検討があるが、典型として引用しているのは国民学校開始以前の一九四〇(昭和一五)年に作成された授業案であり、国民学校開始後の授業については扱っていない。昌子佳広⁴⁾は鳥根県の実践を扱い、有働玲子⁵⁾は東京都杉並区での音声言語指導の実践を扱っているが、一つの学校の国民学校以前と開始後の比較は行われていない。また、国民学校期の明石附属を扱った研究は見られない。本研究はそれら先行研究の成果をふまえつつ、国民科国語の実態を解き明かしていきたい。

二 明石附属と及川平治

まず、国民学校以前の明石附属について確認するために、主事として同校を發展させてきた及川平治の教育理念を整理する。及川平治は一九〇七(明治四〇)年に明石附属に主事として着任し、翌年には一斉授業中に別グループで指導する分団式教育を行い、教材中心から児童中心の授業を展開した。一九一二(大正元)年からは一斉授業に異を唱えた「分団式動的教育」を同校の教育方針に据えた。分団式動的教育とは教材内容や児童の学習状況に応じて全体、グループ、個別に分けて教育することで、学習者が互いに学び合い、能動的态度や自学自習の態度を養成することを目

指したものである⁶⁾。その後、及川平治は欧米九カ国の教育視察の成果をふまえ、一九二五(大正一四)年から「従来の教材本位を児童の生活本位に改め、児童生活の拡張に伴うて題材系列を作る生活単位の教育」を同校の指針に据えた。これは分団式動的教育をより効果的に行うために教科の枠を廃止して一、二年では原則大単位の授業とし、児童が教材を吟味し、直接体験を重視することとで児童の判断力を育成しようとしたカリキュラム改造である。その後、一九三三(昭和八)年には明石附属の独自のカリキュラムによる公開授業を継続して行い、全国からの多くの授業参観者が訪れ、他校に大きな影響を及ぼした。これにより明石附属は地域のみならず全国に名を知られた学校となった。及川平治は一九三六(昭和一一)年に離任したが、その後、一九三九(昭和一四)年まで及川平治の教育理念に基づいた公開授業が行われた。

戦後になり、明石附属は「明石附小プラン」を発表し、コア・カリキュラム運動の中核となったが、それには及川平治の教育方針が大きく反映されていると言われている。明石附属は及川平治の教育理念を受け継いできた学校であると言える。

三 明石附属の皇国化

次に明石附属が皇国化していく過程を確認する。一九三九(昭和一四)年に兵庫県学務部から恩賀主事が着任し、その頃から県当局の指示要項などにより明石附属の教育方針の見直しが進められた。見直しは「国民学校案」に即して行われ、及川平治が提唱した児童中心のカリキュラム改造から「国民学校案」に即した力

リキュラムに変化した。^①

この明石附属の皇国化が一層進んだのは、一九四〇（昭和一五）年七月に玉木俊雄主事が着任してからである。玉木主事はそれまでの明石附属の個性尊重、児童の生活より出発するという教育理念について「出発点に於て児童の必要感に訴へ、児童の興味に訴へる事に依りて教育を進めんとするは、如何なる時代にありても無価値のものではない」と、一度は評価する。その上で「国民学校案」に即して「当校の教育も一度根本的に否定する立場より出立しなければならぬ」とそれまでの明石附属の教育理念を批判する。その批判は次の四項目にまとめられる。

一 国民学校の目標である「皇国ノ道ニ則ル」という大きな目標を掲げず、個性尊重に偏っている点。

二 児童中心にこだわらず、「私意を否定することにより、より高き生活に高め」られない点。

三 生活教育は現実生活に即したものであり、「生活を醇化する」目的を持っていない点。

四 「教育を改革する啓蒙的意義を有しただけに「学習中心」「児童の知育中心」に偏した」結果、身体鍛錬、道徳教育が不十分であり、「学校をあげて国民錬成の道場とする教育であつたとはいへない」点。

これらの批判は個人を中心とした教育理念を否定し、個人の目標よりも高次の社会的な使命、つまり「日本臣民を錬成」という国家国民を形成していくことの正当性を主張するために展開されている。玉木主事は「従来の歴史を十分に検討批判」した結

果であると述べているが、実質的に及川平治の児童中心の教育理念を否定し、国家国民形成の正当性を述べ、皇国化しようとしている。

また、人事についても大きな変更があつた。及川平治と共に実践を研究してきた訓導のうち八名が次々と離任し、一九四一（昭和一六）年の国民学校開始時にはわずか三名を残すだけとなった。その三名も一九四五（昭和二〇）年までに全員離任している。それぞれの訓導の離任理由は不明だが、及川平治の理念を扨拭するような人事であつた。また、及川平治が学校を挙げて研究を促進してきた公開発表会も玉木主事が着任した一九四〇（昭和一五）年からは皇国民錬成を中心テーマにし、及川平治の教育理念による校内研究も途絶えた。

国民学校の目標である「皇国ノ道ニ則ル」によれば児童個人を見つめていく児童中心主義の及川平治の理念は邪魔なものであつたに違いない。このように及川平治の教育理念が否定された国民学校期には、及川平治の理念、つまり明石附属の伝統は継承されたのであろうか。以下に、国民科国語での授業案・発表から検討していく。

四 明石附属の国民科国語の授業案・発表

明石附属が国民学校について研究発表会を行ったのは、一九四〇（昭和一五）年一月より一九四三（昭和一八）年六月までの五回である。その中から国民科国語を扱った授業、発表は以下の通りである。科目欄の「総合」および「総合的取扱」は国民学校

期において実施された「総合教育」^①のことであり、国民科国語の内容を含むものを掲載した。「教材」欄の無印は国民科国語の教材、※は『小学国語読本』の教材、○は教科書にない明石附属の独自教材である。

研究会① 昭和一五年一月一日～一六日「教育研究会」

○授業

学年	科目	題材	指導者	教材
一	総合	私のうち	平松正一	
二	読方	ヲヂサンノウチ	大西義一	※
三	読方	林の中	下村秀次	※

研究会② 昭和一六年六月二三日～一五日「研究発表会」

○授業

学年	科目	題材	指導者	教材
一	総合	おうちの遊び	村上邦雄	
一	総合	カクレンボ	齋藤武人	
一	総合	時の記念日	齋藤武人	
一	総合	キヲツケ	村上邦雄	
二	国民科国語	ねずみのちゑ	永田真雄	
三	国民科国語	クモノス	三木勝雄	※
三	国民科国語	大川	田村正	※
三	国民科国語	さうちの標語	田村正	○

四	国民科国語	錦の御旗	阪下正	※
五	国民科国語	三日月の影	田中武雄	※
六	国民科国語	「説明のし方」の研究	大玉一実	※
高等	国民科国語	海の朝	松岡平八	※

○研究発表「国民科国語の指導組織」 永田真雄

研究会③ 昭和一六年一〇月三日～四日「教育研究会」

○授業

学年	科目	題材	指導者	教材
一	総合的取扱(国民科国語)	オ月サマ	大森豊子	
一	総合的取扱(芸能科工作)	オツキミゴチソウ	大森豊子	
二	国民科国語	日曜日の朝	大西義一	
四	国民科国語	乃木大将の幼年時代	嵯峨山喜八	
六	国民科国語	日本刀	和田令一	※
高等	国民科国語(綴方)	臨戦下の家庭経済	堀田悦朗	○

研究会④ 昭和一七年六月六日～七日「教育研究会」

○授業

学年	科目	題材	指導者	教材
一	総合的取扱(芸能科工作)	デンワヅクリ	木村孫吉	
一	総合的取扱(国民科国語)	デンワアンビオキヤクアビ	木村孫吉	
一	総合的取扱(自然の観察)	デンワ	木村孫吉	
一	総合的取扱(国民科国語)	ヒカウキ	島谷ちゑ子	

五	国民科国語(綴方)	慰問文	嵯峨山喜八	○
五	国民科国語	三日月の影	嵯峨山喜八	※
六	国民科国語	我は海の子	田村稔	

○研究発表「綴方教育の新たな道」 嵯峨山喜八

研究会⑤ 昭和一八年六月二六日―二七日「教育研究会」

○授業

学年	科目	題材	指導者	教材
一	国民科国語	ホタル	大森豊子	
四	国民科国語	兵営だより	和田令一	
五	国民科国語	はくの子馬	堀田悦朗	
六	国民科国語	われは海の子	嵯峨山喜八	
六	国民科国語(綴方)	大東亜戦と我等の覚悟	嵯峨山喜八	○

○研究発表「国心に生きる国語教育」 嵯峨山喜八

五 授業案にみる教育理念の継承

以上の国民科国語の授業・発表から、及川平治の教育理念を継承していると思われるものを検討した結果、以下の四点について類似または継承がみられた。

(一)「劇化」による文章理解の指導

研究会②二年「ねずみのちゑ」はイソップ物語からの教材であり、永田真雄訓導¹²⁾が授業案を提示している。文部省が作成した教師用書ではこの教材を「机上の空論は一見魅力があっても、結局実行の伴はないことを諷する寓話」であるとし、その寓意を讀

むことを目的としている。そして、「読むこと」の取り扱い方では、

短い文章ではあるが、劇的に表現されてゐるから、それを讀みの上にあらはすやうに指導する。

と、指導内容を劇的な表現を理解することにし、「話すこと」の取り扱いでは、

文章や挿画(掛図)に就いて適宜話をさせる。ことにこの話の寓意に就いてもいろいろ考へさせ、発表させる。教材に即して、年よりの鼠のいつたこと、若い鼠のいつたことなどに就いて話をさせる。

と、讀んだ後の考えを話し合わせる活動をさせようとしている。

これに対して明石附属では「目的」を次のようにしている。

童話の面白さを味はせつつ新出文字、難語句を指導し、讀みを深めて「言うは易く行ふは難し」と言つた寓意を感得させると共に、劇演出の能動的な働きにまでたかめ、言語活動を錬成する。

この「劇演出の能動的な働き」という目標は教師用書にはない。文部省では文章を讀むことが中心であるが、永田訓導の場合は文章を讀むだけでなく、「演出」まで学習内容を発展させることを図っている。この「劇化」は第二時で次のように扱っている。

一、本時の目標の指示

劇化へ発展する方向についての話し

二、讀みの指導

1、指名讀

2、自由読—話体箇所の誦誦を目指す

三、劇化への研究

1、登場人物の地位関係の吟味

2、出演についての心構の話し合ひ

四、劇の実演

読本文程度の極めて素朴な演出

指導事項に値する「錬成事項」では、「一、読みの指導」で「話体の箇所に注意させ、生きた言葉として読み得るまでに錬成する。」とあり、また「四、劇の実演」では「きびきびと明確に語り、然も情調をも含めて語るよう注意し、大勢の前で堂々語り得る態度の錬成。」とある。児童に「生きた言葉」や「情調をも含めて語る」ことにより「登場人物の地位」に即して登場人物になりきった話し方を求めている。児童は登場人物の立場に立つて演じることで、その人物の心情や立場を理解していくことになる。他の授業案では、研究会④「三日月の影」や研究会④一年「デンワアソビ・オキヤクアソビ」に同じような「劇化」の活動が見られる。

国民学校以前の明石附属の「劇化」の授業は、一九三三（昭和八）年六月一六日の研究会「第一回新カリキュラムの精神に基づき實際教育の公開」で公開された「国語読本教材の劇化」（平松正一訓導）に見られる。それより遡る一九二八（昭和三）年には明石附属が作成した教案の書式のモデルに「劇化」が見られる。この教案の書式を定めたのは及川平治であり、次のように「劇化」が示されている。

一、学習の動機

二、学習過程

児童の活動

（一）デスカッション

1 ……の能力 2 ……の習慣

（二）劇化

1 ……の態度 2 …… 3 ……の知識

（三）診断テスト

1 …… 2 ……

三、到達目標

A ……の習慣 B ……の態度 C ……の理想 D ……の

能力 E ……の知識

この教案の書式のモデルは国語科に限ったものではなく実技教科以外の教科に共通する書式である。他教科でも「学習過程」に「劇化」が入れられていることは、一九二八（昭和三）年頃の明石附属では「劇化」の活動が日常的に行われていたことを示している。この「劇化」について及川平治は次のように説明している。

劇化とは児童を生活らしい地位に立たしむる手段である。善

き生活装置 (life setting) をなすことである。

及川平治によれば、「劇化」とは劇を演ずることだけではなく、「生活らしい地位」に立つことで教材内容を理解していく方法であるという。「劇化」により、文章の寓意を理解しようとしたのである。それゆえ明石附属では国語のみならず算数でも、店で物を買つときの様子を劇のように演じて、数について理解する

などの実践が行われていた。この「劇化」は他校ではあまり見られない明石附属独特のものであった。

国民学校において示された永田訓導の授業案には及川平治の教育理念と同じ生活化から文章を理解する児童中心の教育理念が見られる。玉木主事が否定した児童中心の教育理念が国民学校期においても実践されている。「劇化」に及川平治の教育理念、つまり明石附属の伝統が継承されていると見ることができよう。

(二) 作者理解による文章理解の指導

研究会②三年「クモノス」の教材は、クモが巣を作る作業を子供が観察している文章であり、三木勝雄訓導¹⁵⁾が授業案を提示している。文部省の教師用書では登場人物の心情理解と、学習者が感動することを中心に扱うことと書かれている。一方、明石附属では次のように作者の立場を想像することが「方針」に書かれている。

一、児童各個が、二階の窓から眺めてゐる気持ちで、作者の心情になりきつて、蜘蛛の一举一動をじつと見つめてゐる、強いしかも親しみのある研究態度で読んでいく時、始めて此の文の理會が出来る。

二、蜘蛛の巣が如何にして形成されるか、その過程の繊細な観察と、作者の心理的動きが、びつたり一体となつてゐる点を感じせしめ、「スツカリ感心シテシマヒマシタ」といふ作者の感動への帰結を中心として、文の構成を考へて行きたい。

この「作者の心情になりきつて」とは作者の立場を想定することとで、これにより文章理解を深めていくことになる。

国民学校以前の明石附属では、及川平治が作者理解について説明している。及川平治は国語科の授業で「作者の地位を想像すること」を取り入れることを次のように述べている。

作者の地位を想像すること。——どんな人が、何時、何のために、どんな場合に、誰に向かつて、どんな考えや心持ちを書いたものであるかを想ふ¹⁶⁾。

及川平治は文章理解のために作者を想定すること、それも「誰に向かつて」など書き手から読み手への関係について考えることも求めている。また、及川平治は次の「文を味わふこと」の説明でも、作者理解について触れている。

(一) 一定の地位(著者の地位、当事者の地位)に自己を想像して読むことⅡ同情を以つて読むこと。

(二) 如何にして改作しても、本文の如く面白い文にならぬことによつて文詞の美を感じる¹⁷⁾こと。

(三) 作者の身分境遇を想像すること。

この及川平治の作者理解による文章理解は、三木訓導の授業案の「方針」と類似している。しかし、この作者の立場を理解する授業案は国民科国語ではこの一例のみであるので、及川平治の影響とは必ずしも言えない。しかし、作者理解による文章理解は児童の立場から授業を考えた結果であるので、児童を中心とした授業が展開されていたことになり、及川平治の理念に共通するものである。

(三) 児童作品の「相互研究」の指導

研究会④五年「慰問文」は戦地の兵隊に実際に慰問文を出した

めの教材であり、嵯峨山喜八訓導¹⁸が授業案を提示している。この教材は教科書に掲載されていない明石附属の独自教材である。授業案では次の計画になっている。

第一時 文話、記述

慰問文について話し、慰問文作制に対する旺盛なる意欲を喚起し記述せしめる。

第二時 児童作品の相互研究

作品中より材料を選んで鑑賞・批評せしめ、文話を行ふ。(本時)

第三時 自己批評の後清書を行ふ。推敲態度の錬成と文字面の整美をはかる。

「本時」にあたる第二時の「授業の内容」を見ると、次のようになっている。

二、児童作品の相互研究

1、「慰問文」を謄写刷りにしたものを配布す(児童作品中より二文程よいと思ふのを用意し静かに配布す。)

2、各目に銘々一度読ませる

3、作者に朗読させる

4、感想の発表

5、指名読(一回)

6、作者に対して質問を行ふ

7、作品についての話合ひ(兵隊さんに喜んで頂けるやうにするには、どうすればよいかと言ふ事を中心として研究を進めて行く。)

児童が書いた「慰問文」を用意し、それを読んで理解し、感想を述べて、質問をする。その上で話し合いをし、どのように書いていけばよいかを検討する。これらの言語活動により、授業を深めていこうとしたのである。教師の一方的な説明ではなく、児童が書いた作品を教材にして、それを検討し話し合いをすることは、児童の言語活動を重視していることになる。このような「相互研究」は研究会⑤六年「大東亜戦と我等の覚悟」にも見られる。

この綴方における「相互研究」については一九四二(昭和一七年)刊行の『各科日授業実践の指針』¹⁹に説明がある。この指針は明石附属の方針である。そこには次のように説明されている。

前時の児童作品を材料にして相互研究を行ひ、文の上で再びその表現場面を想起させ、表現の手法について具体的に文例に則して指導を行ふ。

この指導の注意点として、「文例を特定の児童に偏らない様にする」「よい所も充分強調する様にする」「よく眺め味はふ態度を養成する」「推敲をいとわない気持ちを含養する」の四点が挙げられている。この注意点は児童の学習に配慮したものである。「相互研究」は児童の話し合いを伴い、よりよい表現をさせるためのものであり、そのための配慮は児童中心の教育の理念になっている。

この「相互研究」については文部省の教師用書に書かれていない。むしろ、教師用書では綴方において児童同士が批判すべきでないとしている。それゆえ、児童作品の「相互研究」は明石附属の特徴であると言えよう。

国民学校以前の明石附属では、及川平治が「相互研究」について言及している。及川平治は一九一五（大正四）年の「分団式各科動的教育法」⁽²⁰⁾に次のように述べている。

相互研究の動機——綴方は板上訂正でも、朗読訂正でも、相互に研究させる場合が多い。相互研究の動機を起すには、学級を二分し、甲は発信、記述者となり、乙は受信者、読手となつて批評し合うやうにするがよい、次に甲乙を転換して批評するのである。兎角一児童が自己の作文を発表する場合に、常に学級全体を聴手とするのがよい、斯ういふことは、綴方教育の普通の方法であるべきにはあまり行はれて居らぬやうである。相互研究が動機を以て行はれる様になると記述の態度から違つて来るものである。

及川平治は「相互研究」により児童が互いに学び合い、そこから学習意欲を喚起させようとしたのである。教師が教えることよりも、学習者が学び合う場を作ろうとしたのであり、その姿勢は児童を中心とした教育理念によるものと思われる。

これらと比較すると、嵯峨山訓導の「相互研究」は及川平治と同じ理念であることが明らかにになる。そして児童の立場に立つて考え出された「相互研究」は玉木主事が否定した児童中心の教育である。嵯峨山訓導は及川平治が離任した後に着任して、及川平治との接点は見られない。しかし、嵯峨山の授業案、そして国民科国語の指針に及川平治の「相互研究」の影響があることは、玉木主事が否定した及川平治の理念を、及川平治と直接関わりのないと思われる国語科の教員全体で継承したことになる。それは、

児童の立場に立つ教育が国民学校によって途切れなかったことを示している。

(四) 分団式教育

研究会④一年「デンワ」は「総合的取扱（自然の観察）」であるが、「ヨミカタ」の電話遊びの教材を一部に扱っている。国民科国語に関連して取り上げる。授業案を提示した木村孫吉訓導は、授業の目的を次のよう述べている。

模倣遊びをして楽しく遊ぶ裡に、ほんとうに声が聞えて来るといふことを発見して、玩具といへども実際に話が出来るといふ喜び興味を感じ、どうして伝はつて来るのだらうと考察を進めて行くその態度を養ふ

木村訓導は注意点として「理法を発見せしめたり、態度を訓話する方法であつてはならない。どこまでも自分が作つた電話を使った遊びであるべきである。」と、児童の活動を重視して、自ら発見して、答えを導くことを目的にしている。

「授業の内容」には、前時の反省から「上手にするにはどうしたらよいか」という課題があり、その解決のために「分団学習」をすることが書かれている。これはどのような声で、どのような話し方なら届くかということを話し合い活動で解決しようとしているのである。「分団学習」について触れた授業案はこれのみなので、必ずしも及川平治の影響があるとは言えない。しかし、「態度を訓話する方法であつてはならない」と訓育中心の教育を否定し、児童が主体的な遊びを通じて言語活動をし、電話の機能を学んでいく、いわば生活学習、「劇化」学習がここにある。こ

それは、玉木主事が否定した及川平治の児童中心の教育にはかならない。木村訓導は国民学校実施後に明石附属に着任しており、及川平治と共に研究したわけではないが、及川平治の理念が一部ではあるが、受け継がれていると考えられる。

六 まとめと課題

国民学校期において明石附属は、行政からの圧力、主事の交代による指導体制の変化、及川平治と関わった訓導の退任、皇国的な国民学校理念による児童中心の教育の否定、つまり及川平治の教育理念を否定することにより、皇国化していった。その論拠として、中心を個人からより高い次元の国家に据えることで、皇国化を正当化しようとしていた。その皇国化の中でも国民科国語の授業案・発表からは、次の四点において及川平治の理念、明石附属の伝統を継承したと思われる形跡があった。

- (1) 「劇化」による文章理解の指導
- (2) 作者理解による文章理解の指導
- (3) 児童作品の「相互研究」の指導
- (4) 分団式教育

特に、「劇化」の指導と「相互研究」の指導は及川平治の教育理念の継承が強いと思われる。

しかし、これらの例が見られる授業案は全体からみて少ない。それゆえ及川平治の教育理念は十分に継承されたとは、はっきりと言ひ切れない。むしろ皇国化の波が強い中で、わずかに及川平治の教育理念は継承されたと言ふべきであろう。その中でも及川

平治が離任した後に着任した嵯峨山、木村訓導に、及川平治の理念の継承がみられたことは注目に値する。明石附属の一九三三（昭和八）年からの公開授業では参観者が多数あったと記録にある。それゆえ明石附属の教育は地元や全国各地に影響を与えたと推察される。嵯峨山、木村訓導が及川平治の影響をどこで受けたかは不明であるが、授業案にはその形跡が見られた。それは、他校の訓導にも及川平治の教育理念が支持されたことを物語っている。大きな皇国化の流れの中で、わずかではあるが国民学校以前の児童中心の教育理念は受け継がれていた。このことは、国民科国語においても、国語教育は児童の言語活動が中心に位置することを示している。児童の言語活動を中心とする教育理念が国語教育の不易の部分なのである。

一方で児童中心の教育が国民科国語に継承されていることは問題を残す。児童中心の言語活動の教育であっても、教材や扱い方が皇国化であれば授業は皇国化になってしまう。つまり、児童中心の学習と皇国化とは授業方法と授業内容との別であり、相反するものでない。それゆえ、及川平治の理念は国民学校で途絶えたのではなく、継承されることによって皇国化に組み込まれてしまった面もあるのである。児童中心の言語活動をしても、皇国化に組み込まれてしまうことは、国語教育の脆弱性を露呈することになった。このことについては改めて取り上げたい。

本研究により、明石附属における国民学校期以前の教育理念は、国民学校になって急激に全く別物に変わったのではなく、否定されつつも、わずかではあるが継承され、皇国的な内容に衝突する

ことなく実践できることが明らかになった。そして課題も残された。それは及川平治の教育理念が戦後にどのように継承されたかという点と、他校での教育理念の継承の例の検討などである。今後は、それらの課題を解明し、国民科国語の実態、戦前・戦中・戦後の国語教育の関係について明らかにしていきたい。

注

- (1) 黒川孝広「国民学校国民科国語の成立過程に見られる言語活動意識」『国語科教育』第四十九集（全国大学国語教育学会 平成一三年三月。および以下の口頭発表による。「国民学校国民科国語の教科書（一）内容と表記」全国大学国語教育学会第一〇七回鹿児島大会（二〇〇四年一〇月）。「国民学校国民科国語の教科書（二）内容と扱い方」全国大学国語教育学会第一〇八回山梨大会（二〇〇五年五月）。
- (2) 現在は神戸大学発達科学部附属明石小学校となっている。
- (3) 飛田多喜雄「国語教育方法論史」(明治図書出版 一九六五年三月)
- (4) 昌子佳広「島根県国語教育史研究」(私家版 一九九八年八月)
- (5) 有働玲子「国民学校期の言語」『国語科教育』第四十五集（全国大学国語教育学会 平成一〇年三月）
- (6) 及川平治「分団式動的教育法」(弘学書店 大正元年二月)。本文は『世界教育学選集六九』(明治図書出版 一九七二年六月)によった。
- (7) 及川平治「カリキュラム改造の必要と急務」『兵庫教育』第四九二号（兵庫県教育雑誌社 昭和五年）
- (8) 神戸大学教育学部附属明石小学校『明石附小八十年のあゆみ』(神戸大学教育学部附属明石小学校創立八十周年記念誌 昭和五九年一〇月)
- (9) 訓導を六カ年持ち上がったのを一、三年で交代すること、男女混合

学級を性別学級にすることなど。

- (10) 「本校の事情と国民学校教育の実施」『研究発表録並講演要項』(兵庫県明石女子師範附属小学校 昭和一五年一月)。筆者名は無記名だが、内容から玉木主事が執筆したと推察できる。
- (11) 国民学校教則では「総合教授」が認められ、師範附属のみ実施できるとある。
- (12) 神戸大学教育学部附属明石小学校『明石附小八十年のあゆみ』(神戸大学教育学部附属明石小学校創立八十周年記念誌 昭和五九年一〇月)の職員一覧に永田真雄訓導の名がなく、在職期間は不明である。
- (13) 兵庫県明石女子師範学校「回顧三十年」(兵庫県明石女子師範学校 昭和八年六月)
- (14) 及川平治「小学校カリキュラム問題のシンポジウム」『教育』(茗溪会 昭和一〇年)
- (15) 「明石附小八十年のあゆみ」の職員一覧に三木勝雄訓導の名がなく、在職期間は不明である。
- (16) 及川平治「分団式各科動的教育法」(弘学館書店 大正四年七月) 本文は大正五年一〇月訂正十一版によった。
- (17) (16)に同じ。
- (18) 嵯峨山喜八は昭和一六年四月に明石附属に着任し、昭和一九年九月に離任した。
- (19) 兵庫県明石女子師範附属国民学校『各科日授業実践の指針』(兵庫県明石女子師範附属国民学校 昭和一七年十一月) 内容から見ても、嵯峨山喜八訓導が執筆したと思われる。
- (20) (16)に同じ。

(早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程)